

Title	文学的構造に基づく聖書解釈の試み : 「説得力」ある説教を目指して
Author(s)	菊地, 順
Citation	聖学院大学論叢, 6: 81-96
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=697
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

文学的構造に基づく聖書解釈の試み

——「説得力」ある説教を目指して——

菊 地 順

A Practical Study of the Interpretation of the Bible Based on Its Literary Structure

Jun KIKUCHI

Dr. Kiyoshi Sakon proposes an interpretation of the Bible which is based on its literary structure. This is very useful for our research, because we are interested in the unity of piety and science (*pietas et scientia*). In this paper, “persuasive power” is regarded as the concept that can unite piety and science. We believe that we can approach this unity with the help of Dr. Sakon’s concept. Persuasive power should be the goal of sermons in the Christian Church.

First, we will discuss Dr. Sakon’s idea of the interpretation of the Bible based on its literary structure. Then, we will present a concrete example of this kind of interpretation by examining chapter 45 of Genesis. Finally, we will present a sermon as an example of this kind of interpretation.

はじめに

本論文は、特に学校伝道の関心から、キリスト教の福音をいかに「説得力」をもって宣べ伝えることができるかを最終目標とする、ささやかな実践的試みである。

日本のキリスト者の全人口に占める割合は、1993年度の『キリスト教年鑑』によれば0.86パーセントで、1パーセントを下回っている⁽¹⁾。また、筆者が現在学校伝道に携わっている聖学院大学でも、教職員のキリスト者の割合は高いが、学生のキリスト者の割合は、日本全体のキリスト者の割合をそのまま反映している⁽²⁾。そのような状況の中で、しかも宗教的関心の低い学生たちを学校伝道の対象とすると、少なくとも二つの点について十分考慮されなければならないであろう。すなわち、その一つは、学問の府としての大学にふさわしい伝道の姿勢である。特に、学校伝道の場が全キャンパスに及び、特定の宗教的時間帯だけではなく、授業にもキリスト教関連科目等の形にお

Key words; Interpretation of the Bible, Literary Structure, Piety and Science, Persuasive Power.

いて及んでいるため、大学の探求する学問性に十分耐え得るものでなければならない。また、第二には、そういった学問性をもつだけではなく、同時にそういった学問性に対してキリスト教の「靈性」を保持しなければならない。もしそれに失敗するならば、それはキリスト教ではなく、他のものによって取って代わられ得る別のものとなってしまうであろう。そこで学問性と靈性とを両面を堅持した学校伝道の姿勢が求められることになる⁽³⁾。

本論文の目的は、その理念的な総合を「説得力」として捉え、その説得力を獲得するための一つの具体的な試みを、左近淑氏が説く文学的構造に基づく聖書解釈を手掛かりとし、説教論の問題として扱うことにある。従って、これは理念的探求のための実践的な試みであり、今後の筆者の実践的活動の方向づけをなすものである。

なお、本論の展開は以下のようになる。

- I. 文学的構造に基づく聖書解釈の理念
 - II. 文学的構造に基づく聖書解釈の実例～創世記第45章
 - III. 文学的構造に基づく聖書解釈の応用～説教例
- 結び

I. 文学的構造に基づく聖書解釈の理念

聖書本文の文学的構造に基づいた聖書解釈を提唱したのは、旧約学者の左近淑氏である⁽⁴⁾。しかし、それは必ずしも専門家を対象にしたものではなく、むしろ一般の信徒に対して語られた聖書の読み方であり、その意味でもそれは初めから実践的な内容となっている⁽⁵⁾。

しかしながら、その背後には十分な学問的省察がある。左近氏は、その著『旧約の学び／上』の中で、自分の立場を明らかにする目的で、聖書解釈の歴史について概観しているが、それによると中世の聖書解釈は「比喩的・象徴的・教訓的段階」といった、各種の段階を設定したものであったのに対し、人本主義の影響を受けた宗教改革期では、「センス・リテラリス (sensus literalis) 《字義どおりの意味》」へと集中する、「文法的・教理的」聖書解釈となる。次の正統主義の時代に入ると、それが固定化されてしまうが、その次の敬虔主義の時代にはその固定化が打破され、「聖書を文法的に正確に読み、その結果を人性に適用する」ことを重んじる「文法的・靈的」聖書解釈となる。そして18世紀の合理主義の時代になると、それは「文法的・歴史的」聖書解釈となり、「歴史的・批判的」な聖書の読み方が始まるのである。さらに19世紀後半の四半世紀にはJ. ヴェルハウゼンが現れ、「聖書を文献資料に分解し、編集過程を想定する方法」(文献批評)が始まる。また19世紀末に聖書と密接に関連する古代オリエントの文献資料が多量に発見されるが、それと共に宗教史学派によって「文献以前の口承段階に迫る方法」として、「伝承史的方法」とか「様式史的方法」といった歴史的方法が確立されていくのである⁽⁶⁾。

以上のように、左近氏は聖書研究の学問的方法論を歴史的に概観するのであるが、そこで同氏が問題とすることは、一つには、それが余りにも専門化し過ぎて、あたかも専門家しか聖書解釈に携われないような印象を与えていることである。また一つには、そういった学問的研究が、「聖書の歴史的な成立の側面、生成の面」に焦点を合わせたもので、聖書を全体的に扱っていないということである。すなわち、左近氏は、そういった学問的研究の意味を認めながらも、聖書が「何であるか」を問う「正典論的解釈」（渡辺善太）に欠けていることを問題とするのである⁽⁷⁾。従って、左近氏は、聖書を真剣に読もうとする者であれば誰でもアプローチでき、しかも非学問的とならず、聖書を全体的に扱い得る聖書解釈の立場を目指すのである。それ故、そこに左近氏の聖書解釈の理念があるのであるが、その理念探求の結果見出したのが、聖書の文学的構造に基づく聖書解釈なのである。

それでは、その文学的構造とは何か。左近氏は先ず、自分のこの「研究」について次のように述べている。「本書の『研究』を開いていただければわかることは、聖書という一つの言語作品には、今まであまり気づかれておらず、見過ごしにされ、見落とされていた、ある整った〈つくり〉、結構、構造があるということです。それを発見し、それをしっかりと見据えると、聖書がそこで言おうとしていることが自然とわかってまいります。そして、人の眼鏡を借りずに聖書を読むことができるようになります。それは心躍る経験です。」⁽⁸⁾すなわち、左近氏は、先ず何よりも、聖書が自ずからもっている構造を通して自ら語ることを聞こうとするのである。そして、それは聖書を熱心に読もうとする者には誰にでもアプローチできる「共通な客観性をもった構造」なのである。そのため、この聖書の読み方は、聖書自らが語るその使信を真摯に聞くだけでなく、また同時に客観性を備えた聖書へのアプローチでもあるのである。従って、それはキリスト教の霊性と広い意味での学問性を保持した立場であり、本論文が最終的に目指す「説得力」に至るためのよき導き手となり得るものなのである。

そこで、改めて、文学的構造とは何かを問わなければならない。先ず確認しておかなければならないことは、すでに触れているように、左近氏の立場は聖書を「言語作品」として扱うことから出発している。すなわち、「言語」に注目しているということである。その場合、その言語は、ソーシャルにならって2つの相に分けて捉えられている。すなわち、「通時性」と「共時性」との2つの相である。左近氏によるソーシャルの説によると、語源的意味とか言語の進化的発展などを研究するのが通時性の相に対応しているものであるのに対し、共時性の相とは「時間の軸上の一定の点における具体的な言語の状態とその固有の構造に関連して記述するもの」なのである。そして、言語を「一つの整った体系として存在するもの」として認識するソーシャルは、言語研究において、この通時性の相を優先させているのであるが、これがまた左近氏自身が取らる立場でもあるのである。なぜなら、すでに触れたように、左近氏が聖書解釈の歴史を振り返る中で問題にしたのが、正にこの通時的な一面的聖書解釈であったからである。そして、それはまた、渡辺善太氏が指摘した問題

でもあったわけであるが、ただ左近氏によれば、両者の間には少し相違があり、渡辺氏が文献としての聖書には通時性のみを認め、聖書正典に共時性を認めたのに対し、左近氏は「歴史的でもある文献そのものに言語作品としての共時性を認める」立場に立っているのである⁹⁾。

ところで、この通時性の相に注目して、言語作品としての聖書の構造に迫る訳であるが、その場合、その言語作品の単位となるのは「文段（パラグラフ）」である。左近氏によれば、単位となり得るものには「語（ワード）」「文（センテンス）」「文段」「作品」の4つがあるが、思想の単位となり得るものは、「文章心理学者」の波多野完治氏の説に従って、「一ないし数個の文」からなる文段なのである。なぜなら、文段こそ、「意味の緊張体系と言語の緊張体系との総合」であるからなのである。それに対し、「文」は文段の構成単位（意味の単位）であり、「語」は文（段）の構成要素に留まるものなのである。また、作品全体を論じることは、この文段論と構造論を欠如してしまいかねないのである¹⁰⁾。従って、以上の理由から、左近氏は、文段を単位として聖書の構造的理解を行うのであるが、それはすでに実践的事柄であるため、われわれの理論的追及はここで終わり、次に左近氏の例にならって、実際に文学的構造に基づく聖書解釈の試みへと向かわなければならない。

Ⅱ. 文学的構造に基づく聖書解釈の実例～創世記第45章

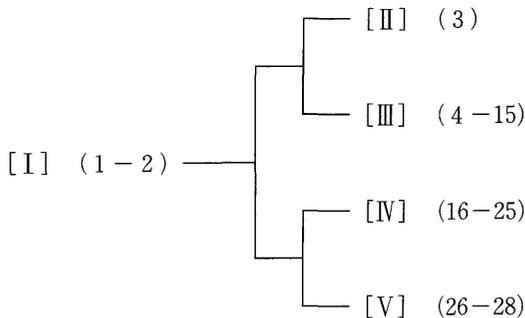
以上の左近氏の見解に基づき、また同氏の実際の解釈にならい、旧約聖書の創世記第45章の解釈を試みることにする。左近氏自身、この創世記第45章をクライマックスとする「ヤコブ物語」全体の文学的構造に基づく聖書解釈を行っているのであるが¹¹⁾、本論で同じテキストの一部を対象とするのは、一つには、本論の試み自体が左近氏の「ヤコブ物語」の構造的分析に触発されたからであり、またもう一つの、そしてそれが主たる理由であるが、それはこの試みの中で明らかになってきたことであるが、文学的構造に基づく聖書解釈の実践において、そこに見られる文学的構造の把握は決して一通りではなく、そこにはそれぞれの視点からの自由な構造的把握が可能であり、その点を明らかにすることも一つの意味のあることであると思われたからである。しかし、紙面的制約もあり、ここでは特にそのクライマックスである創世記の第45章のみを扱う。また、左近氏の第45章の構造的把握の具体的内容については、ここでは触れない。

ところで、本論の視点であるが、基本的には、文段は「意味の緊張体系と言語の緊張体系との総合である」という左近氏の見解に従って、まず全体を把握し、次にそれぞれのグループの分析を試みる訳であるが、左近氏のこの見解と比較した場合、本論は「意味の緊張体系」にもう少し重点を置いたものとなっている。この立場は、言語の構造的理解を踏まえて意味を理解するというだけでなく、構造の把握が意味にある程度依存する形を取っている。すなわち、本論は、言語や表現の類似性から構造を決めていくことと、文の意味上の相違や対応などから構造を決めていくことを、平行的に検討し、第45章全体の構造的理解を試みている。

〈1〉全体的理解

まず、内容からして、この第45章は一つのまとまった話しとなっているのは明白である。そのテーマは、ヨセフの正体が明らかになることにある、と言える。しかも、それは単に兄弟たちに対してだけではなく、派生的にはパロやその家来たちに対しても言えることである。その意味や重さは、兄弟たちとのそれとは異なるであろうが、パロたちが「ヨセフの兄弟たちが来た」という噂によって、間接的にであれ直接的にであれ、「神の霊をもつ」(42:38)へブルびととしか言及されていないヨセフの具体的背景を知る(あるいは見る)ことになったのである。また兄弟たちに対する身の上の告白に劣らず感動的なのは、ヨセフの存命が父ヤコブの知るところとなる場面である。それは、ヤコブにとって、死んだとばかり思っていた息子が実は生きており、しかもエジプト全国のつかさとなっていたという事実の顕現である。すなわち、この45章は、一貫してヨセフのその真の実体(あるいは存在)が、彼に関わるすべての人にあまねく知られるという感動的出来事によって貫かれていると言える。

そこで、45章は、今述べた内容と以下に述べる文体上の構造から、全体的には次の表のように理解することが可能であると考えられる。



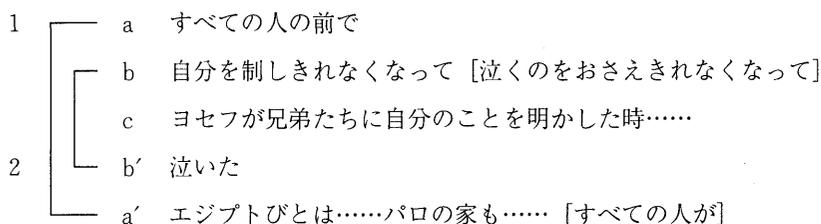
すなわち、[I]の1節から2節までは、後に個別的に検討するように、一つの構造をもつことが可能であると考えられる。また内容上、ヨセフがその身の上を告白する基本的状況が示されていて、少なくとも兄弟たちに対する告白の内容全体(3-15)の序曲的役割をもっているとみなすことができる。また[II]の3節と[III]の4節から15節とを分けたのは、以下で検討するように、それぞれの基本的構造が類似しており、従ってそこには対応する構造があると見なすことができるからである。さらに[IV]の16節から25節と[V]の26節から28節とは、基本的にはヨセフの背景がパロや家来の知るところとなり(その結果、パロはヨセフの父や家族を招くことになる)、また父ヤコブがヨセフの生存を知ることになるという、それぞれ一つのまとまりを成している。またそれと共に、全体として45章の後半を成しているとみなすことができる。従って、45章は全体として5つの部分に分けて理解することができる。そこで次に、その各々について構造的に検討したいと

思う。

〈2〉 個別的理解

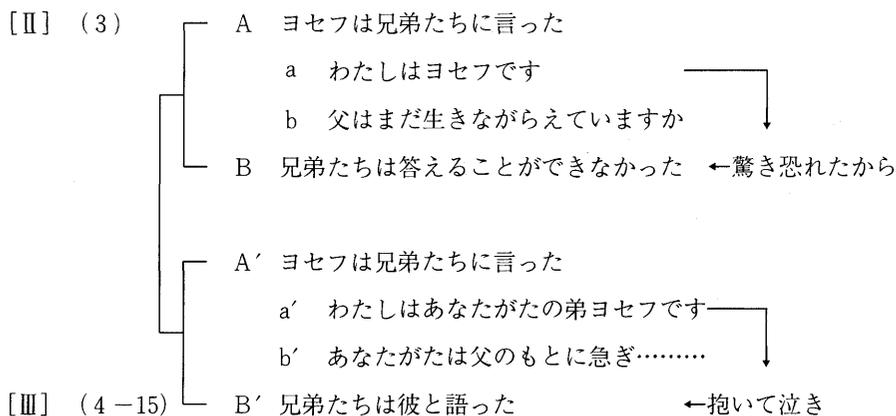
[I] (1-2)

1-2節を一つの構造と見るのは、先に述べたように、このところが15節までのヨセフの告白の序曲的役割をもっていると考えられるのと、以下の表のように、aにおいてヨセフはすべての人の前で泣くことを避けられないとした訳であるが、しかしそれは、a'においてエジプトびともパロも——すべての人が——それを聞くことになり、意味上の対応関係を持ち、またbの「[泣くのを] 制しきれなくなって」というのとb'の「泣いた」ということも、意味上対応しており、これら二つの対応は「ヨセフが兄弟たちに自分のことを明かした時」を軸として成立していると思なすことができるからである。そしてまた、次の[II]と[III]とが、大きく見た場合、構造的対応性をもっていると考えられるので、2節と3節の間で切ることは一つの可能性である。



[II] (3), [III] (4-15)

まず、この両者の構造的対応を示してから、それぞれを検討したいと思う。その対応性は、以下の表のように考えられる。

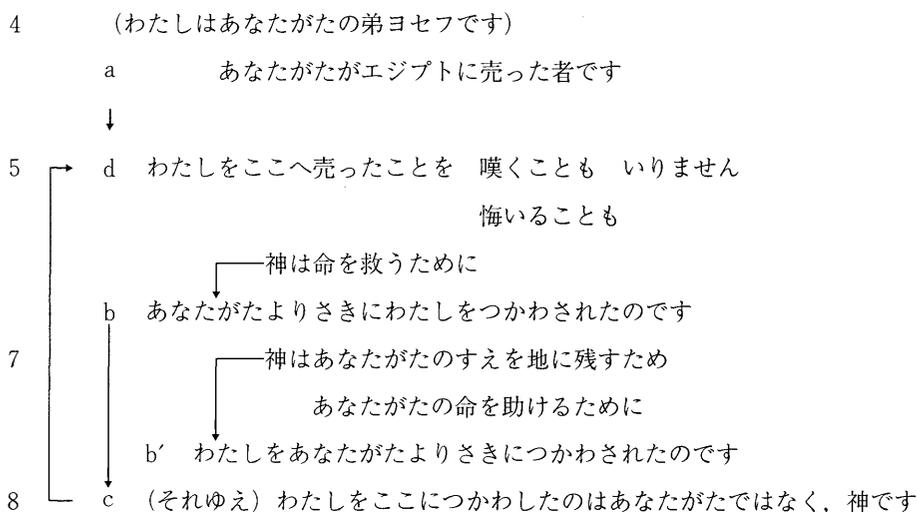


Aの「ヨセフは兄弟たちに言った」というのと、A'の「ヨセフは兄弟たちに言った」というのは、同じ言葉で、それぞれの初めの枠を作っており、またBの「兄弟たちは答えることができなかった」というのと、B'の「兄弟たちは彼と語った」というのは、内容上反対のことを示しているが、しかしそのことにおいて対応しており、またそれぞれの締めくくりの枠となっている。そこで、両者は構造的に同じであると見なすことができる。また、その枠の中にある内容も、aの「わたしはヨセフです」というのと、a'の「わたしはあなたがたの弟ヨセフです……」とは対応しており、またbの「父はまだ生きながらえていますか」と、b'の「あなたがたは父のもとに急ぎ上って言いなさい」とが、父の言及ということで対応している。従って、この3節と4-15節は、長さにおいてかなり異なるが、構造的には基本的に同じであると認めることが可能である。そこで次に[II]と[III]をそれぞれ検討する必要があるが、[II]（3節）はこれ以上の分析は必要でないのので、[III]のみを以下に扱う。

[III] (4-15)

この4節から15節は、さらに内容上次の3つに区分できると考えられる。すなわち、(1)4-8、(2)9-13、(3)14-15である。

(1) 4-8節

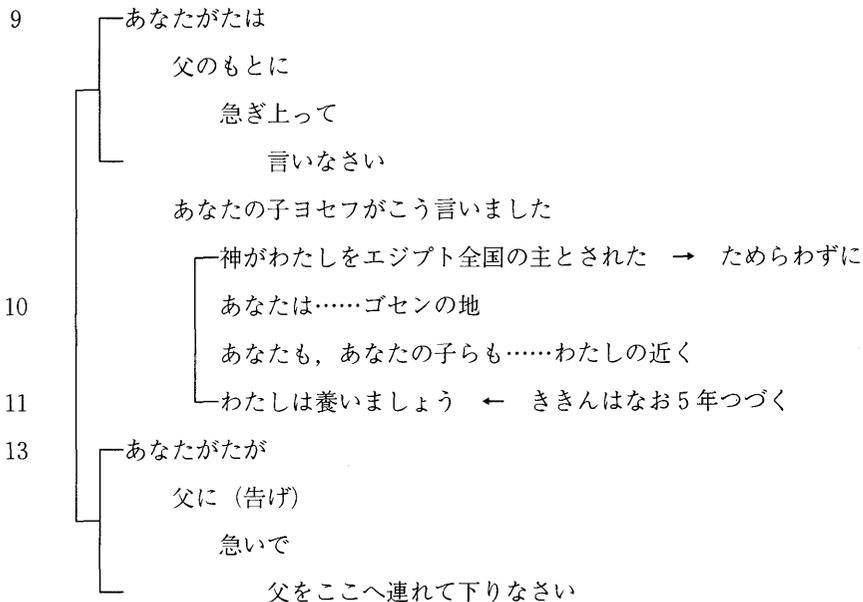


ここでの話しは、前の3節に引き続き、ヨセフがその正体を明かす場面であるが、しかしそれは、3節のそれとはいささか異なり、ヨセフと兄弟たちとの最も肝心な問題から始まっている。それは「あなたがたがエジプトに売った者」というヨセフの言葉である。それに対し、表のように話しが展開しているが、ヨセフはまず兄弟たちを安心させる言葉を述べてから、その理由を展開している。ここに、兄弟たちに対する憎しみや敵意をはるかに越えてしまっているヨセフの愛が見られるが、

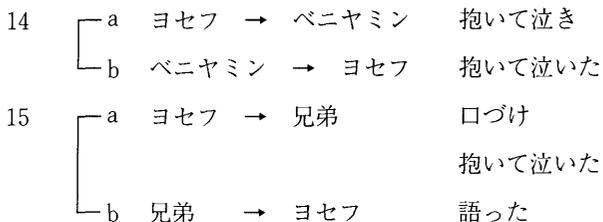
しかしその具体的和解の姿は父ヤコブについての言及の後になる。この話しの展開は [II] (3) のそれと同じであるが、ここにヨセフの兄弟に対する以上の父ヤコブへの思いが感じられる。

(2) 9-13節

ここでは、ヨセフが兄弟たちに命じ、父ヤコブをエジプトに連れて来ることを求めるのであるが、それは以下の表に示すように、対応的構造をもっており、それはヨセフの父に対する思いの深さを語っていると見える。



(3) 14-15節



ここでは、この [II] の初めとなっている和解の言葉が具体的な姿となって現れる。ヨセフはまず弟ベニヤミンを抱いて泣き、またベニヤミンもヨセフを抱いて泣く。次にヨセフは兄弟に口づけしてから同じように抱いて泣き、その後兄弟たちはヨセフと語り合う。ここでヨセフと兄弟たちとの心からの和解が実現したのであるが、この内容は初めにも述べたように [II] の結びとなっている。

る「兄弟たちは答えることができなかった」という対照的内容と対応しており、この〔Ⅲ〕の結びとなっている。またこれは4節の「わたしに近寄ってください」という言葉と実によく対応しており、結びとしてふさわしいと言える。

以上で第45章の前半が終わるのであるが、後半は、初めにも述べたように、内容上前半の派生である。しかし、前半に劣らず、特に父ヤコブの場面は感動的である。以下、〔Ⅳ〕〔Ⅴ〕をそれぞれ構造的に検討することにする。

〔Ⅳ〕 (16-25)

このところはさらに二つに分けられる。すなわち、(1)16-20、(2)21-25である。

(1) 16-20

16 「ヨセフの兄弟たちがきた」……うわさ → パロの家

17 パロ → ヨセフ

17-18 兄弟たちに言いなさい …………… 19 彼らに命じなさい

あなたがたはこうしなさい …………… あなたがたはこうしなさい

獣に荷を負わせてカナンの地に行き …… エジプトの地から車をもって行き

父と家族を連れて …………… 父を連れて

エジプト全国の良い物は …………… エジプトの良い物を与えます

ここでは「ヨセフの兄弟たちがきた」といううわさがパロの家に聞こえ、パロとその家族たちが喜ぶという書き出しで始まるが、これは45章の序曲と見なした1-2節と対応しているともできると思う。1-2節でヨセフが行ったことは、「兄弟たちに自分を明かし」そして「声をあげて泣いた」ことであるが、前者はその後の3-15節で展開され、後者はこの16節に対応していると考えられる。それは、ヨセフが声をあげて泣いた時、「エジプトびとはこれを聞き、パロの家もこれを聞いた」のであるが、ヨセフが泣いた直接の引き金は自分のことを兄弟たちに明かしたことにあり、従って泣き声を聞くというのと、「ヨセフの兄弟たちがきた」といううわさを聞くということは、時間的経過を思わせるが、内容的には呼応していると言えるからである。もしこのように45章の後半を成す初めの16節が1-2節に対応しているとすれば、1-2節はなおのこと序曲としての役割が大であると言えよう。

ところで、うわさを聞いたパロは喜び、そしてヨセフに父と家族をエジプトに連れて来るように言う。それは17-18節と19節の二回にわたって述べられているが、それは表が示すように類似している。この重複性は、パロのヨセフとその家族に対する思いの深さを示していると言える。

(2) 21-25

パロの命令に対し、ヨセフは十分な用意を整え、父ヤコブを連れてくるために兄弟たちを送り出す。彼らはエジプトから上ってカナンの地に入り、父のもとに行く。構造は以下の通りである。

21	イスラエルの子らはそのようにした	
22	ヨセフは パロの命に従って	…… 与え
23	彼 [ヨセフ] は 父に	…… 贈った
24	ヨセフは 兄弟たちを	送り去らせ 言った
25	彼ら [兄弟たち]	父ヤコブのもとへ

[V] (26-28)

最後の26-28節には、以下のような対応する構造が見られる。

26	彼は言った ヨセフは生きていて	
27	ヤコブは気が遠くなった ← 信じられなかったから 彼らはヨセフが語った言葉を…… 父ヤコブは 元気づいた ← 車を見て	
28	イスラエルは言った ヨセフはまだ生きている わたしは死ぬ前に行って彼を見よう	

この場面は、兄弟に対する身の告白の場面に劣らず感動的で、父ヤコブの驚きと喜びはその態度によく示されている。ヤコブはヨセフが生きていると聞いて、信じられずに気が遠くなるが、兄弟たちの言葉を裏付ける証拠（車）を見て元気づき、「わが子ヨセフがまだ生きている」という感動的事実に直面する。そして「わたしは死ぬ前に行って彼を見よう」という言葉は、ヨセフを失った時の「いや、わたしは嘆きながら陰府に下って、わが子のもとへ行こう」(37:35) というあの絶望的な言葉と対応していると言えるが、内容的には、それと対照的に、実に生氣にあふれており、ヨセフ物語のクライマックスの結びにふさわしい言葉である。

以上、創世記第45章を構造的に理解することを試みた訳であるが、それを通して明らかになるこ

とは、この45章には二つの視点があるということである。その一つは、話しの筋としてのそれであって、特にこの45章は「ヨセフ物語」のクライマックスとなっている。もう一つは、ヨセフ物語の意味付けとしてのそれである。従って、45章は正にヨセフ物語の中心と言えるが、しかし構造的に見て行った場合、その中心となっているのはあくまでもその話しの流れの方にあると言える。兄弟たちから憎まれ、エジプトに売られたヨセフが、長い年月を経た後、偶然に彼らに会うことになり、そしてしばらくの葛藤の後、ついに兄弟たちにその正体を明かし、彼らと和解し、そしてそれが父の知るところとなったという物語の筋としてのクライマックスである。しかし、読み手が一般にここで注目することは、「神は命を救うために、あなたがたよりもさきにわたしをつかわされたのです」という理解である。そして、それは第7節で「神はあなたがたのすえを地に残すため」と拡大され、普遍化され、その意味は深められている。しかし、これは明らかに一つの物語を越えた視点から書かれており、それは第50章24節の「神は必ずあなたがたを顧みて、この国から連れ出し、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた地に導き上られるでしょう」と対応して、イスラエルの歴史的救済観に連なっていると考えられる。従って、その意味では、旧約の信仰的、神学的視点から見れば、こちらの方が中心であると言えるが、しかし構造的に見れば、それはヨセフ物語の流れの中に組み込まれているのであって、決してその中心とはなっていないように思える。

すなわち、以上が文学的構造に基づく解釈によって浮き彫りにされる点であるが、それはわれわれに聖書の内容を十分尊重しつつ、しかもそれをより客観的に把握する可能性を示すものであり、そこにこの方法の意味があり、われわれが取り組むべき価値があるのである。

Ⅲ. 文学的構造に基づく聖書解釈の応用～説教例

本節では、以上の文学的構造に基づく聖書解釈の応用として、本論が最終的に目指す「説得力」ある説教の、そのささやかな試みの一例を示したいと思う。選んだテキストは、新約聖書のマタイによる福音書第20章1節から16節のイエスによる天国の譬え話しである。ここでは、このテキストの構造分析は示さないが、説教の中でも言及するように、ここには一つの言葉に集中していく全体的構造が見られる。説教は、その構造をたどりながら、その中心の言葉を明らかにし、さらにそれを掘り下げながら、このテキスト全体のメッセージを聞こうとしている。説教題は、「天国を見る目」である¹²⁾。

《説教例》

「天国」という言葉を聞くとき、みなさんは何を思い浮かべるでしょうか。ある人は、死後の世界というものを連想されるかもしれません。またある人は、完全な救いの世界というものに思いを馳せるかもしれません。しかし、またある人は、本当に天国なんてあるんだろうか、それは人間の

空想の産物ではないのか、と疑問をもつかもできません。おそらく、天国についての一致した意見に到達するという事は、難しいことだと思います。それは、なによりも、「天国」というのは、直接わたしたちの肉眼で見ることができない世界ではないからです。「天国」という字が示すように、それは「天」の国です、この世の世界を越えた世界だからです。しかしまた、同時に、天国の「国」という字は、もともとこの世の国、この世の世界を指し示す言葉でもあります。そのことは、天国はこの世界と無関係ではない、天国はこの世界そのものではないが、しかしこの世と無縁ではない、ということの意味をしています。むしろ、この世界の中であって、この肉体の目では直接見ることができないけれども、しかし仰ぎみることができるとする世界、神の国、それが天国として語られているものなのです。

この直接見ることができない神の国、天国を、イエス・キリストは、ここで「譬え」を用いて語られています。直接見ることができない世界を、直接見ることができるとする世界の一部を譬えとして用いることによって語っているわけです。しかし、不思議なことに、天国というのは、この「見る」ということと深く関わっているのです。直接見ることができない天国というのは本当にあるのだろうかとか疑わしくなるときがありますが、しかし天国というのは「ある」とか「ない」とかの問題ではなく、それは「見える」か「見えない」かの問題なのです。イエス・キリストは、天国はこの肉体の目をもってしては直接見ることができないけれども、しかしそれは理解するとか想像するとかいうことではなく、やはり「見る」という仕方では分からない世界であるということ、この譬えを用いて語られているのです。

この譬え話しは、よく知られているぶどう園の譬え話しです。ぶどう園の主人が、朝早くから働いた者にも、昼頃から働いた者にも、夕方から働いた者にも、同額の賃金を払ったという話しです。今では、1日の労働時間は9時から5時までというのが一般的だと思います。しかし、この聖書の時代では、夜明けから日没までというのが1日の労働時間と考えられていました。そのため、このぶどう園の主人は、「夜が明けると同時に」出掛けて行って、1日の仕事に必要な労働者を雇い入れたのです。その時、ぶどう園の主人は、労働者たちと、1日1デナリと約束します。これは1日に必要な生活費に相当し、この額は当時においてはごく普通の、正当な額でした。しかし、不思議なことに、このぶどう園の主人は、9時ごろ、12時ごろ、3時ごろ、さらに5時ごろと、4回にもわたって、市場で仕事がなく何もしないでいる人たちを雇い入れたというのです。朝早くから、市場には仕事を求める人たちがたくさんいたはずですが。そしてぶどう園の主人は、朝に1日の仕事に必要な十分な労働者を雇い入れたはずですが。しかし、このぶどう園の主人は、その後も、仕事がなく何もしないでいる者たちを見つけては、雇い入れたというのです。ここに、このたとえ話しの第1の不思議な点があります。そして、第2の不思議な点は、この主人が、朝早くから働いた者にも、夕方の5時頃から働いた者にも同じ額の賃金を払ったということです。夜明けから日没まで働いた者は、夕方の5時から働いた者よりも10倍以上も長い間、しかも暑さと埃の中、全身に汗をかきな

がら働いたはずです。しかし、この主人は、長い間働いた者にも、夕方の涼しい時にわずか1時間ほどしか働かなかった者にも、同じ額の賃金を払ったというのです。そして、もう1つの最後の不思議な点は、この主人が、最後に雇った者たちからはじめて、順々に最初に雇った者たちへと賃金を支払ったということです。もし、最初に雇われた者たちから賃金を支払っていたならば、おそらく彼は、約束の賃金をもらってよろこんで帰っていったことだろうと思います。しかし、順序は逆でした。一番最後に雇われた者から支払われていきました。そして1時間ほどしか働かなかった者たちから1デナリを支払ったのです。それを見て、朝早くから働いた者たちが、もっと多く貰えるだろうと思ったのは当然のことでした。しかし、彼らに払われた賃金は、同じ額の1デナリだったのです。彼らは落胆し、そして主人に彼らの不平をおつけました。「この最後の者たちは1時間しか働かなかったのに、あなたは1日じゅう、労苦と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いをなさいました。」この彼らの不平は、わたしたちの常識からみれば、もっともなことです。しかし、その時、このぶどう園の主人はこう言いました。「友よ、わたしはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと1デナリの約束をしたではないか。自分の賃金を、もらって行きなさい。わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。自分の物を自分がしたいようにするのは、当たりまえではないか。それともわたしが気前よくしているので、ねたましく思うのか。」ぶどう園の主人は、自分には何の不正もないことを述べた後、彼らの心を見抜いて、最後に「ねたましく思うのか」と単刀直入に話しています。すなわち、このところに、この譬え話しの中心があるのです。

ねたましく思う、それはこの状況からすれば、当然のことではないでしょうか。必ずしも必要ではない労働者を雇い入れ、わずか1時間しか働かなかった者たちにも、しかもその者たちから、同額の賃金を払っていったのですから、そこに「ねたみ」が生じないはずはないのです。「ねたみ」は、比較するところから生じて来ます。たとえ、1日1デナリと約束しても、自分より10分の1も働かなかった者が、同額の賃金をもらうのを見るとき、自分の労働とその者の労働とを比較して、人はねたましく思うのです。そして、比較する相手が身近であればあるほど、人は激しくねたむのではないのでしょうか。この朝早くから働いた者たちも、もし1時間しか働かなかった者が1デナリをもらったということを、他の社会での話として聞いたならば、ただうらやましく思っただけでありましょう。しかし、同じ職場の中に、同じ友人仲間の中に、自分より恵まれていると思える者、自分より優れていると思える者、あるいは自分に無いものをもっていると思える者、そういった者たちがいて、彼らと自分を比較するとき、人はうらやましいと思うだけではなく、時にはねたましく思うのではないのでしょうか。

しかし、ここで「ねたましく思う」と訳されている言葉は、もともとは「悪い」という意味です。文語体の聖書では、このところは「汝の目、悪しきか」と訳されています。あなたの目が悪いのではないかと言うのです。もちろん、これは肉体の眼のことを言っているわけではありません。見るべ

きものが見えない心の目のことが言われているのです。ぶどう園の主人は、不平を言った者に対して、あなたの目が悪いのではないかと言ったのです。それはなぜでしょうか。彼らは何が見えなかったのでしょうか。ぶどう園の主人の寛大さでしょうか。もちろん、それもあると思います。しかし、このテキストが語ることは、それ以上に、彼らは自分たちがおかれている立場に気づかなかったということではないでしょうか。彼らは、1時間しか働かなかった者たちと比較して、自分たちはこんなに働いたのに、その労苦にふさわしい、当然の報いを受けなかったと不平を言いました。しかし、彼らは他の者と自分たちを比較したとき、1つの重要な点を見失ったのです。それは、彼ら自身も1日の生活の糧を得るために雇われた者であるということです。彼らが当然得ることができている賃金も、もしかすると他の人がもっていたものかもしれないのです。しかし、他者と比較して、自分たちは当然もっと多くもらえるはずだと思ったとき、彼らは賃金を当然のものとして主張したばかりでなく、その約束の賃金に不満すら覚え、偶然にも与えられた仕事の恵みを忘れてしまったのです。

わたしたちの常識から見れば、賃金は労働に対する正当な当然の報酬です。しかし、そういった見方は正しいのでしょうか。あるいは、当然であると理解するだけで十分なのでしょうか。パウロは、「あなたの持っているもので、もらっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜもらっていないもののように誇るのか」と語っています。わたしたちが持っているものだけでなく、わたしたちが努力し獲得したものであっても、そこには常に与えられているという面があるのではないのでしょうか。働く力も技術もその仕事も、その場所も、そしてその命までも、神から与えられることなく持つことはできないのではないのでしょうか。当然と思えることも、その本当のところには、与えられているという、この不思議さがあるのではないのでしょうか。そうであるならば、賃金は正当な報酬であるとしても、しかしそれはまた感謝して受けるべきもの、すなわち、恵みでもあると言わなければなりません。他の人と比較し、ねたみを起こしたとき、最初から働いていた者は、そのことを見失ったのです。仕事にありつかなかった者は、1日中空腹のまま、何もせずに、不安と焦燥感に駆られながら、生活していたのではないのでしょうか。しかし、彼らは、朝早くから、1日の糧を得るための仕事が与えられ、苦しい労働の中にあっても、また希望をもって生きることができたのではないのでしょうか。その意味では、彼らは初めから恵みに招かれていたのです。しかし、彼らには、その恵みが見えなかったのです。そして、与えられているものが恵みとして、感謝をもって受け取ることができない者には、このぶどう園の主人の寛大さは理解できないのです。天国は見えないのです。それが、この「ねたみ」、「悪しき目」として、この譬えが語ることなのです。

ねたみを覚えたことのない人は、本当に幸いであると思います。ねたみは、人の心を歪め、魂の平安を奪い、時には悪しき思いで人の心を満たします。弟のアベルをねたましく思った兄のカインは、弟を殺してしまいました。それが、聖書が語る最初の兄弟に起こった出来事でした。人間の心の底の底には、この思いがあるのではないのでしょうか。そして、わたしたちの心の底にあるねたむ

思いが、天国ってあるんだろうかという思いに向かわせているのではないのでしょうか。天国とは、神が支配されている世界のことです。わたしたちに命を与え、わたしたちを恵み給う神の支配です。ですから、それは「ない」のではないのです。そうではなく、それを見るべきわたしたちの目が悪くなっているのです。ねたみに心が曇らされ、見るべき神の恵みが見えなくなっているのです。そうであるとするならば、わたしたちは、どうしたら天国を見る目をもつことができるのでしょうか。どうしたら、わたしたちは、ねたむ思いを脱ぎ去り、神の支配を見ることができるようでしょうか。

聖書は、しばしば「目」について語っています。同じマタイによる福音書の6章では、こう語られています。「目はからだのあかりである。だから、あなたがたの目が澄んでおれば、全身も明るいであろう。しかし、あなたがたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。」もちろん、ここでも「目」は一つの比喩として語られています。ここで語られている目が悪いという表現は、ねたましく思うという表現と同じです。わたしたちは、このねたましく思う悪しき目ではなく澄んだ目をもたなければならないのです。しかし、澄んだ目とはどのような目なのでしょうか。今、一般に使われている英語の聖書では、この言葉は“clear”と訳されています。日本語訳の澄んでいるという表現と同じです。しかし、もう一世代前の英語の聖書では、それは“sound”と訳されています。それは健全であるという意味です。澄んでいるというのは、清らかであるというだけではなく、健全でなければならないのです。物事をしっかりと見極める力のある目でなければならないのです。さらに、もっと古い《King James Version》では、この言葉は“single”と訳されています。それは「一つである」という意味です。そして、実はこれがもともとのギリシア語の意味なのです。すなわち、あなたの目が一つであるならば、一つを見つめる目であるならば、あなたの目は健全であり、澄んでいると言うのです。これは、大変興味深い表現ではないでしょうか。「悪しき目」「ねたみ」というのは、あちらこちらを見、比較することの中から生まれてきます。自分と他人とを比較し、自分のものと他人のものとを比較し、自分に与えられている恵みを忘れて行く中で、ねたみが起こるのです。しかし、いたずらに比較するのではなく、自分自身を、また自分自身に与えられているものを、恵みとして見つめて行くことができるとき、わたしたちはそれを感謝をもって受け取ることができるのです。その逆に、感謝して受け取ることができないとき、人はいくら多くのものを得ても、本当には満たされないのです。比較とねたみの貧しさから抜け出すことはできないのです。しかし、神の恵みを見つめるとき、わたしたちは感謝せざるを得ないのです。感謝するということは、比較を越えて、与えられた恵みを見つめ、それを喜ぶことだからです。そして、ただその中でのみ、わたしたちは天国、すなわち神の支配し給う世界を仰ぎ見ることができるのです。

この一つの眼差し、一つの目、それが天国を見る目である目なのです。そして、わたしたちは、その天国を見る目をもたなければならないのです。

結 び

以上、学問性と霊性との総合という理念的形の探求を、「説得力」を具体的目標に、文学的構造に基づく聖書解釈を手段とし、主に実践面から試みた訳であるが、その具体的目標がどの程度達成されているかは別問題としても、そこには山の尾根を縦走するような危険な一面がある。それは、学問性と霊性という、地上的なものとなん天上的なものとの総合の試みにおいては、どちらか一方に足を踏み外してしまい、単なる理性一辺倒の合理主義や、あるいは宗教的熱狂主義に陥ってしまう危険性があるからである。しかし、その危険性を背負うことなくして尾根を縦走することはできず、そのことは、この試みが決して理論的な整合性でもって達成されるものではなく、絶えず実践から実践へと継続する中でしかその目標に近付くことができないことを語っているように思う。従って、本論の試みも、その実践のささやかな一部であり、この理念に向かう姿勢を示したもののなのである。

注

- (1) キリスト教新聞社編『キリスト教年鑑』1993年度版559頁。
- (2) 宗教センターの調べでは、1993年度現在、大学専任教員56名中34名(60.7%)、短大専任教員24名中15名(62.5%)、総合研究所所員6名中5名(83.3%)、専任事務職員40名中16名(40.0%)で、全体では126名中70名となり、全体に占めるクリスチャンの割合は55.6%である。それに対し、学生のクリスチャンの割合は、大学の場合、全学生1,232名中54名(4.4%)と少ない。
- (3) 大木英夫氏は、この問題を「教育の神学—現代日本におけるキリスト教学校の文化的意義との関連で—」(学校伝道研究会編『教育の神学』所収)の中で、「敬虔と学問」(pietas et scientia)の問題として掘り下げて論じている。
- (4) 「著者左近(旧姓木下)淑は、1931年、横浜に生まれた。1948年、日本キリスト教神学専門学校予科入学をもって神学の学びに進み、日本を代表する世界に聞こえた旧約学者となったが、1990年9月、59歳の若さで急逝した。」(『左近淑著作集』第1巻、「解説」より)
- (5) 左近淑著『旧約の学び/上』の「はじめに」参照。
- (6) 同、12-16頁。
- (7) 同、17頁。
- (8) 同、11頁。
- (9) 同、18頁。
- (10) 同、20-21頁。
- (11) 同、23頁以下。
- (12) この説教は全学礼拝で実際に行ったものである。